

生涯にわたる探求心、私たちはどんな芽を育むのか

校長 辻 浩

本校では、2006年から連続してスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の取り組みを行ってきた。一般的に考えれば、スーパーサイエンスは大学や研究機関で生み出されるものなので、中学や高校はそこにつながる芽を育むことが役割となる。

このことを私が研究している生涯学習から考えると次のように言うことができる。

生涯教育という言葉が国際的に承認されたのは1965年のユネスコ成人教育推進委員会においてであり、そこでは、社会の大きな変化の中で、人生の各時期の教育を統合するとともに、学校と社会・職場が連携する必要が唱えられた。このことは日本社会ではすぐには取り入れられなかったが、1984年に設置された臨時教育審議会の第二次答申で、「生涯学習体系への移行」という考えのもと本格化することになった。アジア諸国が技術力を伸ばし国際競争が激しくなるとともに市場のグローバル化がすすもうとしている中で、それまでのような、大学受験が終わると勉学への意欲が減退する学歴社会では行き詰まると考えられ、大学生や社会人が生涯にわたって職業能力を伸ばす学習社会に転換することが提起された。その中で、学校教育は生涯学習体系の一部であるとされ、科学の基礎をしっかりと身につけるとともに、科学の力で課題を解決する経験をする中で、生涯にわたって科学に関心を持ち勉学に取り組む意欲を育むことが求められた。

本校のSSHの取り組みの中では、中学で課題研究への導入を行い、高校の3年間を通してそれを積み上げるとともに、各教科でも協同的探求学習を行い、さらにそれを国際的に発信して交流を深めている。学校で学ぶことは基礎的であるためにこれが社会の中でどう生きるのかわからないと言われることが多いが、本校ではこのようなプログラムを通して、課題解決の経験をしている。また、これらのことを名古屋大学と連携して行うために、高大接続研究センターが設置され、実践と研究が展開されている。これらのことから、本校の教育は受験を突破するための学力を身につけるだけでなく、生涯にわたって科学への関心を持ち学び続ける芽を育てているということができる。

しかし、国際的な生涯学習の流れは1965年の成人教育委員会のままではない。その後の国際成人教育会議では、1972年の第3回会議で、学習機会から排除された

「忘れられた人びと」に注目する必要が謳われ、80年の第4回会議で、学習権によって「自らの歴史をつくる主体」になっていくことが確認され、97年の第5回会議では、「持続可能な発展」のために人権の保障とすべての人の社会参加のための学習が必要であるとされた。貧困や障害、性、民族、ジェンダーなどで社会的に排除された人びとが、社会に参加しながら自己を高めるものとして生涯学習が位置づけられるようになったのである。このような議論が交わされる背景には、南北格差の拡大と紛争、環境破壊が世界の最も大きな課題として理解されるようになったということがある。

このことに注目すると、生涯にわたって職業能力を伸ばすだけではなく、社会的に弱い立場の人の人権を実現させることと、恵まれた環境にある人はそのことに理解を示すことが求められている。そこでは、国際的な課題になっている紛争や飢餓、難民、環境破壊といった問題に取り組むとともに、日本社会にある格差の拡大や貧困の広がり、障害のある人や外国にルーツをもつ人たちへの差別といった問題に関心をもつことが必要になる。そして学校の日常で言えば、「いじり」や「からかい」で人間関係をつくらず、「いじめ」を根絶することも課題となる。

このようなことにどのように取り組んでいけばいいのか。もちろん、このこともSSHの取り組みとして展開することもできる。その一方で、科学で割り切ることが難しい人間の品性や正義感を育むことも必要ではないかとも思われる。今年世界中を席捲している新型コロナウイルスをめぐる問題に対しても、このような科学と倫理というアプローチは必要である。

いずれにしても、今日の学校教育は生涯にわたる探求心の芽を育てる必要がある。それは今日のように経済優先の風潮の中では、職業能力を伸ばすことばかりに目を奪われ、人間の品性や正義感は蔑ろにされてしまうかもしれない。本校で学んだ生徒が職業能力と倫理の両面を生涯にわたって探求することで、社会に貢献するとともに幸せな人生を送ってもらいたいと願っている。その芽をどう育むかが今日の学校に与えられた課題となっている。